



株式会社 麻生園芸

経営概要

代表者：代表取締役社長 麻生 朗 氏

所在地：佐賀県唐津市

従業員：37名（正社員5名、パート32名）

うち外国人材10名（全員女性：特定技能3名、技能実習7名）

※令和7年1月現在

栽培品目：大葉、青しそ、バジル 2.5ha

加工品：紫蘇ジュース、青しそを原料にした麺類（そうめん、うどん、そば）



朗氏の祖父はみかんを栽培。昭和59年、朗氏の父が青しそ（大葉）の栽培を開始し、昭和63年に「有限会社麻生園芸」を設立。その後、平成11年に株式会社化し、朗氏が代表取締役に就任した平成25年からバジルの栽培も手掛ける。令和元年にJGAPの認証を取得（大葉とバジル）し、この取組を社内の環境整備にも活かしている。

昨今、農家の後継者の減少とともに過疎化が進む中、「地元で若者が安心して働ける場を作りたい」という思いで、地元が必要とされる企業を目指して、大葉とともに企業も成長を続けている。

外国人材の受入れについて

➤ 受け入れのきっかけを教えてください。

約20年前の父の代から、外国人材を受入れています。父は他県の先進的な経営者の方々から情報を入手しながら、当初は中国人を雇用していました。しかし、徐々に中国の人材が集まりにくくなり、技能実習生の監理団体を変更した後、監理団体の薦めもあり、ベトナム人の受入れを開始しました。そのベトナムの人材も農業分野よりも工業系や食品系の分野への希望者が増加しつつあり、現在では、インドネシアの人材が集まり始めています。出身国の異なる外国人材を受入れることについては、お互いに母国語が通じないことから、日本語で話す習慣を身に付ける環境づくりができるなどのメリットもあります。

現在、出身国はベトナムが7名、インドネシアが3名で、20歳代から40歳代までの人材を雇用しています。全員が女性です。

➤ 外国人材の業務内容や受入れの効果はどうか。



麻生代表取締役社長

主な作業は収穫作業ですが、水管理、肥培管理、病害虫防除、出荷調整など、あらゆる作業に従事してもらっています。日本人だけの作業環境と比べると、彼女らの働き方から多様化を実感することができ、若い世代でもあることから、社内の雰囲気も以前より明るくなったと感じています。

また、ベトナム出身者は母国でも家庭の農作業を手伝っているためなのか、手先が器用で作業効率のアップにも繋がっています。日本人の従業員も「若者には負けれん。」と、作業意欲への相乗効果をもたらしているようです。

一方、文化的な違いによる戸惑いや言葉が伝わりにくいもどかしさなどを時折、感じています。

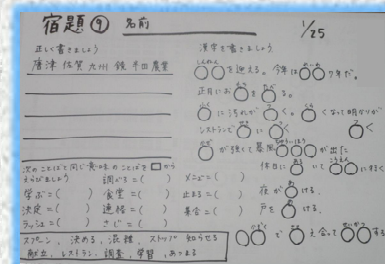
受入れ農家としての取組(教育・研修)

➤ 外国人への教育の取組などについて教えてください。

昨年から、週1回、手作りの日本語テストを実施しています。できるだけ、この地域で生活していく上で役立つように、地元の地名などを漢字で書く練習や、季節の行事として話題になる言葉、耳で聞いただけでは同じ発音でわかりにくい言葉（同音異義語）を漢字で書くことなどを題材としたオリジナルのテストです。理解度には個人差がありますので、少しでも上達するよう手助けしたいと思い、取り組んでいます。

また、年に1回、日本人従業員を含めた全員参加の「経営指針発表会」を開催し、特に頑張った社員の表彰も行っています。

外国人従業員の中には、日本語能力の高い者も数名おり、特定技能2号の資格に合格した者も1名います。国籍にかかわらず、優秀な人材は努力家でも感じています。



手作りの日本語テストの例



経営指針発表会

➤ 生活に関する支援などの取組を教えてください。

従業員の住居は、以前会議室として使用していた社屋の2階を個室の部屋へ改修し、確保しています。家賃は1人当たり2万円/月です。台所は建物内に2か所あるため、それぞれが自炊をして食事をしているようです。

年に1度は職場旅行を企画し、実習生の誕生日には食事とケーキでお祝いをするなどによって、懇親を深めています。

近隣住民とのトラブルは特にないようです。最初から「挨拶をすること」を徹底しています。地域のお祭りに参加したり、いちご狩りに声をかけてもらったり、みかんなどをいただいたりして、地域の方々に可愛がってもらっていると感じています。



実習生の誕生日会



食事会



夏祭りへ参加

今後の事業展開

➤ 今後の展開や取組について教えてください。

現在、外国人材は10名ですが、もっと増やしてもいいとも考えています。彼女らの思いがけない知識や発想をこれからもっともっと日本の農業分野に加えていただいて、Win-Winの関係で成長していけたらと思っています。

また、弊社の経営が良くなることで、地域の農業にも良い影響を与えることができると考えています。

まだまだ構想段階ではありますが、地元で組合を作り外国人材の労働力を活用することで農業を持続的に発展させていくことや弊社で関わった外国人材を通じた海外での事業展開、他企業と連携したビジネスへのチャレンジなど、実現したら面白いだろうな、と日々、考えています。